日本の思想と近代哲学

卞崇道 著

學苑出版社

日本の思想と近代哲学

卞崇道 著

學苑出版社

图书在版编目（CIP）数据

日本の思想と近代哲学：日文／卞崇道著. —北京：学苑出版社，2012.10

ISBN 978-7-5077-4130-8

Ⅰ.①日… Ⅱ.①卞… Ⅲ.①近代哲学—哲学思想—日本—文集—日文 Ⅳ.①B313.4-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2012）第 248258 号

责任编辑：韩继忠

出版发行：学苑出版社

社　　址：北京市丰台区南方庄 2 号院 1 号楼

邮政编码：100079

网　　址：www.book001.com

电子邮箱：xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话：010-67675512、67678944、67601101（邮购）

经　　销：新华书店

印 刷 厂：永恒印刷有限公司

开本尺寸：880 毫米×1230 毫米　1/32

印　　张：14

字　　数：400 千字

版　　次：2012 年 10 月第 1 版

印　　次：2012 年 10 月第 1 次印刷

定　　价：38.00 元

版权所有　翻印必究

如发现质量问题，请直接与发行部联系调换

寝食を忘れて三十年

――序に代えて

林美茂

卞崇道先生に初めて出会ったのは二〇〇六年春のことであった。当時、私は日本から北京に帰ってきて、教職探しの旅をしていた。人望のある学界の先輩方の厚い友情に恵まれ、十数年ぶりの北京は私を暖かく迎えてくれた。その時、中国社会科学院に勤めていた親しい友人高洪先生(日本研究所研究員)のご紹介で卞先生と知り合うようになった。それ以来親しく交友の日々を重ね、多大なご教示と励ましを頂き、あっという間に十年の歳月が過ぎてしまった。今になって思いかえせば、まるで昨日の出来事のようである。

現代中国の学界における日本哲学の研究者と言えば、誰もがすぐに卞崇道先生の名前を思い浮かぶに違いない。中国ばかりではなく、日本の学界でも同じことである。二〇〇六年三月に、日本の世界思想社から出版された『日本哲学の国際性――海外における受容と展望』には、中国語圏における日本哲学の研究者は、朱謙之、劉及辰の次に挙げられたのは卞崇道先生の名前である。南開大学の劉岳兵教授は、朱謙之と劉及辰を中国における日本哲学の第一世代の研究者とし、卞崇道と王守華などを第二世代の代表的研究者に位置づけている。

周知の通り、中国における日本哲学の研究は、他のヨーロッパ哲学と違って、あまり人気のない分野である。一般には、哲学と言えば、我々はすぐにヨーロッパの学問だと思い、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、

フイヒテ、ヘーゲル、マルクス、ハイデガーなどの名前を挙げるが、日本人の哲学者は、西田幾多郎のほかに、あまり名前を思いつかないのが現状である。日本には哲学がない、という中江兆民が下した結論は、学者の間で暗黙の了解になっているように感じられる。中国の大学には、日本哲学を研究し、さらに教えることの出来る学者は非常に少ない。多くの大学には、外国哲学の研究室が重点学科として設けられているが、その中には日本哲学の研究者は殆どいない。日本哲学ばかりでなく、東方哲学(日本では東洋哲学と呼び、中国哲学をこれに含んでいるが、中国では中国哲学を東洋哲学から独立させ、外国哲学と平行した重点学科になっている。中国でいう東方哲学は、主にインド、日本、イスラム、韓国などの哲学思想の研究で構成されている)というジャンルは何時の間にか大学から姿を消した。現在、残っているのは中国社会科学院哲学研究所の東方哲学研究室だけになってしまった。卞崇道先生は一九八一年に、中国社会科学院の修士課程を経て、この研究室に入り、中国学界における日本哲学を研究する極めて貴重な存在になった。

哲学という学問は、歴史の発展につれて次第に思想と区別がつかなくなり、世俗化してきたが、元来、知を愛するという一種精神性の追求が根底に横たわる人間の魂の営みである。知的好奇心が旺盛で、心から本物の真実愛がなければ、倦むことがなく、長続きしない厳しい修業である。人気のある哲学者やジャンルを対象に研究することさえ寂しさに耐えなければならないという試練が待ち構えているのに、人気のないジャンルを選ぶのは一層勇気が求められる。卞崇道先生はまさに心から日本哲学に対する真摯の愛と勇気のある、数少ない研究者の一人であると言えよう。しかし、この選択はその後の試練が並々ならぬ苦労と努力の道を行くことを強いられるようになった。

一九四二年に生まれた卞崇道先生は日本哲学の研究者の職に就いたのは四〇歳の時だった。朱謙之や劉及辰などの中国における第一世代の日本哲学研究者は、当時中国のイデオロギーを意識しながら研究を行い、「唯物弁証法と唯物史観の観点に立ったものでなければならなかった」(張政遠、二〇〇六年)という指摘がしばしばな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

されている。それはその通りであるが、劉及辰の『西田哲学』（一九六三年）と朱謙之の『日本哲学史』（一九六四年）などを紐解けば、誰もがこの特徴に気づくだろう。このような認識で教育を受け、文化大革革後最初に育てられた研究者としての卞崇道先生は、まず同様の視点に立って出発をせねばならなかった。しかし、従来の唯物主義か唯心主義かという二分法で日本哲学を捉える研究には不満を感じたのか、就職してから間もなく、四〇歳を越えたにも関わらず、彼は日本への私費留学を決行した。二〇一一年に天津で行われたある研究会で、日本人の学者高坂史郎教授から聞かされたエピソードは印象的だった。それは、一九八〇年代に大阪である留学生から受けた深い感動の話である。その学生は既に中年になっているが、生活費のために深夜までアルバイトをしたにも関わらず、毎日自転車で通学し、一生懸命日本哲学の研究に励み、非常に質素な生活を送っていることを目の当たりにした時の感動は今なお鮮明に記憶に残っているそうである。その留学生は、まさに卞崇道先生のことであった。

日本から帰ってきた卞崇道先生は、元来、中国で形成された研究方法や哲学の視点を克服しつつ、新たな研究段階に入り、また日本の学界との学術交流も活発に行い、日本と中国との学術的な架け橋のような存在になった。その後、一九九〇年代には、また二度にわたる東京大学での客員研究を経て、研究成果を積み重ね、二〇〇〇年に入ってから次々に新たな研究成果を発表し、日本の学者との共同研究の機会も多くなり、中国の学界における日本哲学研究の第一人者になっただけでなく、日本の学界にも認められた海外の日本哲学研究者となった。この間、卞崇道先生は、自分の研究成果を挙げて行くばかりでなく、自分の研究を受け継ぐべき若手研究者を育てることにも力を注いだ。現在、中国における日本哲学の若手研究者は、京都大学出身のアモイ大学の呉光輝教授の外に、卞崇道先生の門下生は絶対多数を占めている。なにしろ、王守華先生の弟子達や、日本で学位を取って帰ってきた王青、郭連友、韓東育などの有力な若手諸氏は、日本思想史の研究に傾いているからである。長年にわたる一筋の研究と多くの研究成果が認められ、二〇〇六年に六〇歳にして、嘗ての留学先である

日本関西大学から、日本哲学研究の文学博士号が授与された。十数年の時を費やしてここまで辿り付くことが出来た卞崇道先生に、我々は深い敬意を払わずに居られなかった。

本著を紐解けば誰もが気づくだろうが、卞崇道先生の日本研究は哲学、思想、文化など研究領域が非常に幅広く、且つ深みのあるものであった。そのほか先生が刊行した二冊の中国語版の単著『融合与共生――东亚视域中日本哲学』(人民出版社，二〇〇八年)、『东亚哲学与教育』(中国社会科学出版社，二〇〇九年)を読んでも同様の印象がある。普通、研究者としては、ある一人の哲学者を研究対象にして研究論著を出すことが一般的であった。しかし、卞崇道先生の日本研究は、複数の研究対象についてそれぞれの研究論文を書き、それらの論文を集めて一冊の著書に編集して出版するのである。このような研究スタイルについて、以下四つの原因が考えられる。まず、この著書に収められた多くの論文は、日本の学者との共同研究の成果であることから見ると、異なる共同研究のテーマやジャンルを、ある特定の一人の哲学者や思想家に限定して研究するのが出来ないことは言うまでもない。それぞれの共同研究テーマに応じて研究を進めて行くしかないのは仕方ないことである。次に、中国における日本哲学の研究論文が少なく、研究者も極めて少ないので、出来るだけ広い分野に研究論文を出して、学界に日本研究の種を蒔くことは必要である。第三、若手研究者を育てて行くために、それぞれの学生が持つ素質や性向に即して異なる研究テーマを与え、それに関する自分の研究も必要になり、研究対象を広げざるを得なかったのではないだろうか。最後に指摘しなければならないのは、今日の中国学界において、研究者に対する評価体制は業績の計量化によって決められるのである。このような現実の中で生きようとする研究者は、限られた研究対象を深く掘り下げ、高度な専門性と独創性を求めるより、出来るだけ領域を広げ、常識的な博識性を追求する方が好まれるのである。勿論、卞崇道先生の日本研究は、これらの四つの原因が共に働いているばかりでなく、極めて荒涼たる中国における日本哲学の研究現状を目の前にして、中年になってやっと研究者の職についた限界を感じながら、限られた時間の中で、出来るだけ研究分野を広げ、日本の哲学、思想、文化を

含めたテーマでより多くの成果を残し、中国の学界における日本哲学などの研究の基礎を作り、次の世代の若手研究者にバトン・タッチして行く願いが込められていることもあったのであろう。まさにこれらの原因と苦慮に基づいて、卞崇道先生は、このような日本に関する研究の特徴が生まれたのではなかろうか。

学術研究というのは、一つのテーマでも長い時間を要することが周知のことである。それなのに、卞崇道先生の日本哲学研究は、多岐にわたり、普通では成し遂げられないものであろう。このような研究業績の背後には、血を吐くような苦労があったに違いない。日本の近代哲学を中心に、近世から現代思想まで領域を広げ、さらに日本の文化や教育思想にまで視野に入れた研究は、旺盛な知的好奇心と燃えるような情熱の持ち主でなければ、簡単に遂行することが出来ないであろう。まさに長年に亘る「本の香りが燈影を揺らしながら、気づかずにまたも夜更けた」(书香摇影已通宵)のような研究の日々を過ごされたのが原因で、二〇〇九年五月のある日、大腸癌が先生の体を蝕んでいることが判明した。手術直前に死を覚悟して、先生は一篇の述懐詩を詠んだ。

寝食を忘れて三十年
凝思しつつ伏案続ける中に、またも新篇を著わんとす
赤き蝋燭は燃え尽きようとすれども、筆は未だ置けず
書稿は将に天へ持ち入らんと欲す

废寝忘食三十年
凝思伏案著新篇
红烛殆尽未封笔
书稿欲将带入天

この詩は先生が三十年間の研究生活を見事に纏めたものである。「寝食を忘れて三十年」の日々を送ってきた先生の研究生活は、中国の学界に数多くの業績を遺し、多大な貢献をなされたのである。その研究業績は先生の著書を読めば判るのであるが、先生の貢献は少なくとも以下の四つの点で指摘することが出来る。まず、多くの若手研究者を育てた。次に、中国における日本語能力のある日本研究者の力を活かし、日本哲学、思想、文化の名著や研究文献などを中国語に翻訳、紹介することに尽力した。第三、長年に亘って休止状態になっている「中華日本哲学会」の学会活動を復活させて、軌道に乗せ、さらに若手リーダを育てて、世代交代の大任を果たされ、将来に向けての発展の道を開くことが出来た。第四に、中国と日本との間の学術的架け橋になって、尽力されてきた。

当然、卞崇道先生の日本哲学、思想に関する研究の特徴は、彼が帰属するパイオニアにも匹敵する世代の限界でもあることを、我々が認識せねばならないことを言うまでもない。そういう意味で、先生の研究は我々にとっても特徴であり、課題でもある。本著のように、先生が幅広く蒔いた各分野の種をいかに大きく育てあげ、それぞれの研究対象に関する研究を深く掘り下げ、一つ一つの論著に実らせて行くことが、我々第三世代の使命であり、急務であろう。

二〇一二の春、長年に亘る過労と疲れを知らない先生の研究生活に、再び赤信号が点った、三年前に手術した体が、完全に回復したかと思ったが、先生の持病が再発した。坦々とした明るい気持ちで闘病生活を送りながら、先生はいままで日本語で執筆し、日本で発表した数多くの論文の中から、日本思想と近代哲学に関するものだけを選び、一冊の本に纏め、出版することにした。この先生の言葉通り「最後の念願を果たし」たいというような大著について、序文の執筆を頼まれた私は、肩に重荷を圧し掛かったように感じた。というのは、この依頼は、先生から序文を書いて欲しいというよりも、さらなる深い期待がメッセージに含まれているように気がしたからである。

最後に、強靭な意志で苦痛と戦う日々の中で、なお楽観的に、知を愛する情熱が冷めない姿勢で家族や親類、友人、弟子、後学などを安心させようとする先生の闊達かつ前向きな人生観を讃えたいと思いながら、先生の詩にある次の二句を加えて、この序文のペンを置きたい。

死に向かって生きる侍の魂は
何ぞ人生永遠ならざるを懼れんや
向死而生武士魂
何惧人生不永恒

二〇一二年初秋の日

目次

東アジアにおける近代日本哲学の意義
——明治哲学を中心に——……一
東アジアの哲学史上における西周思想の意義……一七
福沢諭吉の哲学思想について……三二
福沢諭吉の文明史観……八一
思想における東洋と西洋の間に
——井上哲次郎を中心に——……一〇一
西田幾多郎と現代日本哲学……一一二
西田哲学の宗教的特性について
——宗教間対話の可能性——……一三三
宗教と哲学との関係について
——井上円了と西田幾多郎を比較して——……一四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三木哲学を論ずる……一六〇
和辻倫理学の現代的意義……一九八
竹内良知
——日本的近代意識の形成を模索した思索者——……二〇六
日本の実存哲学者鈴木亨……二四一
新市民社会論の構築
——吉田傑俊氏の後期学術思想を中心に——……二五六
東アジアの視野における日本近代思想……二六七
安藤昌益から明治哲学まで……二八六
安藤昌益と日本の近代化……二九九
二宮尊徳の公共性思想
——公共哲学の視点を中心に——……三〇九
共生哲学を構築するために……三一四
共生・和合の社会哲学的意義について……三三五
哲学用語の定訳から異文化間の対話と交流を見る……三五七
日本の近代化と戦後五〇年
——「脱亜入欧」から「脱欧入亜」へ——……三六三

中国の哲学と日本の哲学との対話 …… 三八四
中国における日本思想史の研究 …… 四〇二

付録一

現代哲学の課題
——「西田哲学で現代社会を観る」を読む—— …… 四一七
哲学する人
——中村雄二郎先生との出会い—— …… 四二二
船山信一先生と中国 …… 四二六

付録二

卞崇道研究成果リスト …… 四二九
あとがき …… 四三三

東アジアにおける近代日本哲学の意義

——明治哲学を中心に——

一、序

東アジアの近代史の上で、日本は自ら二重の性格を描きだしている。十九世紀の半ば、西洋列強の侵入に直面して、日本は世界の情勢を冷静に認識し、明治維新という自らの革新運動によって、強力な国家を確立した。それによって植民地、半植民地化されることを避け得たばかりでなく、それを契機として、資本主義近代化の方向に発展していった。他方、二〇世紀前半期において、日本は文明開化、殖産興業を経て、富国強兵を達成した。そして、西洋列強の列に加わり、彼らとともにアジアを分割争奪し、さらに中国への侵略の道を歩んでいった。このことは、アジア諸国の人々に大きな被害と災難をもたらした。また、日本自身にも極めて大きな損失をもたらしたのである。東アジアの近代史の展開において、日本が示した二重の性格は、今日から見て日本を含む東アジア諸国の人民に深い啓発を与え、重要な現実的意義をもつのである。

では、近代日本人の上述の行動を支配する思想、特にその哲学思想は何であろうか。近代日本の哲学思想は、東アジアにとってどのような意義があるのであろうか。ここで、私は明治哲学を中心として、近代日本哲学の成立という視点から、基本的な考えを論述したい。

二、近代日本哲学の成立の特徴

日本には哲学があるのか。もしあれば、それはいつから、そしていかに生まれたのであろうか。このことは今日から見れば、自明の問題であるように思われるが、吟味に値する問題でもある。

1　日本には哲学が存在しない

ここでまず説明すべきものは、ここでいう「哲学」がphilosophyという意味での哲学であり、一般的な意味での「思想」ではない。周知の通り、中江兆民が「わが日本に哲学なし」①という名言を発した。その名言を永田広志氏は、『日本哲学思想史』の序論で解釈しているが②、それをめぐって一九八〇年代に、中国の日本研究者の中で議論が生じた。兆民の名言が二つの事実を示唆しているというものである。その一つは、philosophyが日本に移植される以前に、日本に「哲学」が存在しないという事実を言明したとする。というのも、西周によってphilosophyが「哲学」と定訳されるまで、日本人が「哲学」という学問を全く知らなかったし、ましてその内容をわかっていたとはいえないからである。では、古代から中世を経て近世までに、日本人は自らの思想をもたなかったのであろうか。いや、そうではない。特に江戸時代の思想は、溌剌とした力に溢れ、数多く独創的な理論成果を修めた。しかし、ギリシャのプラトン、アリストテレスから近代ドイツのカント、ヘーゲルまでの各時代の思想家たちがもっぱら「哲学」という学問に専念し、厳密な論理構造と理論体系をもつ「哲学」を創立したことに比べれば、前近代の日本に純粋な意味で「哲学」がなかったと言えるだろう。言い換えれば、西洋の「哲学」が日本に移植

---

①中江兆民、井田進也校注『一年有半・続一年有半』〈岩波文庫〉、岩波書店、一九九五年、三一頁。
②永田広志『日本哲学思想史』〈永田広志日本哲学思想史第一巻〉、法政大学出版局、一九六七年、序説参照。

されるとき、日本にそれを受容する哲学的基礎がなかったのである。

兆民の名言におけるもう一つの意味は、明治初期に体系を備えた日本哲学がまだないという事実を言明したことである。西周、津田真道らが西洋留学から帰国した後、西洋の人文社会科学を全面的に導入する過程で、philosophyを日本に移入することで、日本人は初めて「哲学」の意味を理解した。さらに、井上哲次郎がドイツで哲学を専攻し、帰国した後、東京大学で哲学講座を設け、日本で「哲学」が一つの学科として講義された。それは日本哲学研究を開始の標しである。総体から見れば、明治初期に哲学活動があり、西周、加藤弘之、井上哲次郎らのような優秀な思想家が現れ、数多くの哲学論文を発表したにもかかわらず、結局彼らは専門の哲学者ではなかった。彼らの主な貢献が西洋哲学を日本へ紹介し、哲学の啓蒙活動をすることにあった。哲学体系を構築した思想家ではあったけれども、真の体系的な哲学が創立されないままに留まったのである。したがって、厳密な意味からいえば、その時の日本には自分の哲学がまだなく、せいぜい自分の哲学研究があっただけだといえるだろう。

2　西洋哲学の移植を契機に日本哲学を成立

上述した中江兆民の名言は、もう一つの視点から次のことをわれわれに示している。つまり日本哲学成立の本質的な特徴は、西洋哲学の移植を媒介とし、それを契機としていることである。先に述べたように、日本に西洋哲学を受け取る哲学的基礎が存在しないことは、日本の土着思想にそれがないことを意味する。しかしながら、幕末の洋学研究が、意外にも西洋哲学を導入するための基礎を築いたということができる。

周知のように、日本が洋学を受容するのは、明治維新から始まるのではない。早くは十六世紀中頃から、キリスト教が既に伝播していた。後に禁止されたが、宣教師によって創立された神学校では、宗教哲学が伝授されていた。また「享保の改革」の期間には、幕藩体制の危機を救い、さらにそれを強化するために、日本は西洋学問を

導入しはじめた。そのとき、それを「蘭学」と呼んで、ヨーロッパの各科学及びヨーロッパの状況に関する研究を行った。内容としては、医学、暦学、天文学、本草学、兵学等の諸領域にわたっていた。しかし、当時受容された洋学は、科学技術に厳しく限定されていた。このような洋学受容の方式は、その後の日本学問に決定的な影響を与えた。洋学受容の先駆者である新井白石は、「西洋紀聞」のなかで自分の洋学観をまとめている。彼は洋学を「形而上なるもの」を知らず、「ただ其形と器」つまり「形而下なるもののみ」に精緻な学問であると断定している。換言すれば、洋学は物理的、実理的な側面に関しては優れているが、精神的、道義的な側面については全く見るべきものがないという評価を下したのである。白石が提出したこのような洋学観は後世に深い影響を及ぼした。後ほど佐久間象山の「東洋道徳、西洋芸術(＝技術)」の思想や、橋本左内の「器械芸術取於彼、仁義忠孝存於我」という主張はみな白石に由来していた。幕末に入ると、洋学は知識人階層から庶民階層まで拡大すると同時に、幕藩体制批判の芽生えとなった。渡辺崋山や高野長英をはしめとする「尚歯会」が幕府からの弾圧を受けた「蛮社の獄」は、その代表的例であろう。崋山は、近代欧米の先進的な自然科学や技術のみならず、社会制度、教育制度の発展にも重視する必要があると考えた。崋山によれば、それらをもたらした原動力となったのは「物理の学」である。「物理の学」は、自然科学や科学技術の分野にのみ限定されるのでなく、社会科学または社会、教育制度の領域をも貫く精神的支柱として捉えられている。彼の見解には、西洋文明を物質文明に限定し、東洋文明を精神文化として優位に置く白石以来の洋学受容のありかたを脱却しうる方向さえ窺えるのである。高野長英も洋学受容の先駆者の一人であり、自然科学史をのべた著作『聞見漫録』のなかで、「西洋学術の部」と題する一章を設けている。そこで彼は、西洋哲学をタレスから説きおこし、ピタゴラス、ソクラテス、プラトン、アリストテレスを簡潔に叙述し、コペルニクス、ガリレイについて触れ、デカルトを近代合理主義の創立者とみなしている。「世人千古ノ学風ヲ棄テ、実学ノ真理に入ルハ、此人の力ナリ」。さらに、ベーコンに言及したうえで、近代の「実学ノ真理」を徹底させ近代合理主義を確立した哲学者として、ニュートン、ライプニッツ、ロックの三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com